

群馬県における狩猟免許未更新者の実態

上田 剛平 (21世紀の狩猟学研究グループ)

1. はじめに

日本の狩猟者は、1980年代以降減少を続けており(上田, 2009), 群馬県も例外ではない。群馬県在住者の狩猟者登録数は、1978年には9,470件であったがその後減少し、2005年では2,976件とかつての31.4%になっている(環境省, 1963-2005)(図1)。また、高齢化も進行しており、2005年の

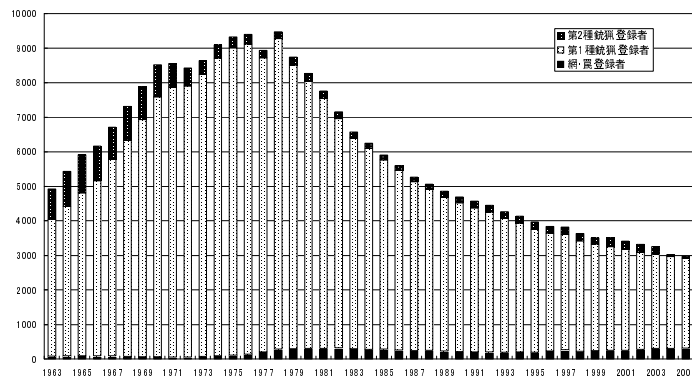


図1 群馬県における県内在住者の狩猟登録者数の推移

狩猟免許所持者のうち、60歳以上が46.9%を占めており、20代・30代は合わせて4.7%しかいない(環境省, 2005)。その一方で、野生動物による農林業被害は深刻で、捕獲に対する要望が高まっている。このままでは、近い将来狩猟者は消滅し、捕獲ができなくなってしまうことが予想され、新規狩猟者の獲得とともに、既存の狩猟者の維持対策の検討が緊急の行政課題である。しかし、狩猟者が

狩猟を辞める理由について調査された事例はなく、課題解決に向けた具体的な政策を打ち出すための基礎的なデータが不足している。そこで本調査では、狩猟免許を更新しなかった人、つまり狩猟を辞めた人を対象としたアンケートを実施し、その実態と意識を調査した。

2. 材料と方法

平成20年の狩猟免許更新対象者のうち、更新しなかった者(以下、未更新者と記す)を対象にアンケートを郵送した。その際、有効な別種の狩猟免許を所持している人は調査対象外とした。配布数40通、回収数16通、回収率は40.0%であった。

アンケートの質問項目は、狩猟の実態に関する設問(8問)、狩猟に対する意識に関する設問(2問)、属性に関する設問(2問)とし、選択回答式とした。

狩猟を辞めた理由に関する設問では、それぞれの選択肢が、狩猟を辞めるきっかけとして、どの程度影響を与えたのかを明らかにするため、「そうである・どちらかといえばそうである・どちらともいえない・どちらかといえばそうではない・そうではない」で5段階の評価をしてもらい、それぞれを5~1点のスコアに換算して分析を行った。また、「そうである」を選んだ人の割合を選択肢ごとに算出し、分析を行った。集計の際、無回答のものを除外した。

3. 結果

未更新者の属性(表1)

未更新者の平均年齢は 61.1 ± 15.0 (SD) (n=16)で、年齢層で見れば「60代」、「70代以上」(ともに31.3%)が最も多く、ついで「50代」(18.8%)であった。所持していた狩猟免許の種類については、「網・罠のみ」(46.7%)が最も多く、ついで「第1種銃猟のみ」(33.3%)であった。図1で示した種類別の狩猟者登録数と比較すると、未更新者は網・罠免許所持者の割合が多いことが分かっ

た。

表1 未更新者の属性について

| 属性 | 項目 | n | (%) |
|-------------------|-----------|---|-----------------|
| 年齢 (n=16) | 20代 | 0 | 0.0% |
| | 30代 | 2 | 12.5% |
| | 40代 | 1 | 6.3% |
| | 50代 | 3 | 18.8% |
| | 60代 | 5 | 31.3% |
| | 70代以上 | 5 | 31.3% |
| | 平均値 標準偏差 | | 61.1 ± 15.0(SD) |
| 狩猟免許の種類 (n=15) | 網・農のみ | 7 | 46.7% |
| | 第1種銃猟のみ | 5 | 33.3% |
| | 第2種銃猟のみ | 2 | 13.3% |
| | 網・農と第1種銃猟 | 1 | 6.7% |
| | 網・農と第2種銃猟 | 0 | 0.0% |

未更新者の狩猟の実態

未更新者の狩猟経験年数は、「10年以下」(46.2%)が最も多く、ついで「11～20年」(30.8%)と「41年以上」(23.1%)が多く、ベテランと初心者に二極化していた(表2)。

狩猟を始めた頃の狩猟対象動物は、「イノシシ」(40.0%)が最も多く、ついで「キジ・ヤマドリ類」(20.0%)であった。狩猟を辞める前の狩猟対象動物は、「キジ・ヤマドリ類」(6.7%)が減少し、「イノシシ」(60.0%)が増加していた(表3)。

狩猟を始めた頃の狩猟方法は、「脚くり罠」(43.8%)が最も多く、ついで「銃(犬あり)」(25.0%)、「銃(犬なし)」(18.8%)であった。狩猟を始めた頃と狩猟を辞める前の狩猟方法に大きな変化はなかった(表4)。

狩猟を始めた頃の狩猟方法は、「脚くり罠」(43.8%)が最も多く、ついで「銃(犬あり)」(25.0%)、「銃(犬なし)」(18.8%)であった。狩猟を始めた頃と狩猟を辞める前の狩猟方法に大きな変化はなかった(表4)。

表2 未更新者の狩猟経験年数について(N=13)

| 経験年数 | n | (%) |
|--------|---|-------|
| 5年未満 | 2 | 15.4% |
| 5～10年 | 4 | 30.8% |
| 11～20年 | 4 | 30.8% |
| 21～30年 | 0 | 0.0% |
| 31～40年 | 0 | 0.0% |
| 41年以上 | 3 | 23.1% |

※無回答は3名であった。

表3 未更新者の狩猟を始めた頃と狩猟を辞める前の狩猟対象動物について

| | 狩猟開始時(N=15) | | 狩猟引退時(N=15) | |
|-----------|-------------|-------|-------------|-------|
| | n | (%) | n | (%) |
| キジ・ヤマドリ類 | 3 | 20.0% | 1 | 6.7% |
| カモ類 | 1 | 6.7% | 0 | 0.0% |
| スズメ類 | 1 | 6.7% | 1 | 6.7% |
| カラス類 | 1 | 6.7% | 1 | 6.7% |
| イノシシ | 6 | 40.0% | 9 | 60.0% |
| シカ | 1 | 6.7% | 1 | 6.7% |
| イタチやタヌキなど | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| 狩猟をやっていない | 2 | 13.3% | 2 | 13.3% |

※無効回答はともに1名であった。

表4 未更新者の狩猟を始めた時と狩猟を辞めた時の狩猟方法について(複数回答可)

| 狩猟方法 | 狩猟開始時(N=16) | | 狩猟引退時(N=16) | |
|----------|-------------|-------|-------------|-------|
| | n | (%) | n | (%) |
| 銃(犬あり) | 4 | 25.0% | 3 | 18.8% |
| 銃(犬なし) | 3 | 18.8% | 2 | 12.5% |
| 空気銃 | 2 | 12.5% | 2 | 12.5% |
| 脚くり罠 | 7 | 43.8% | 7 | 43.8% |
| 箱罠 | 1 | 6.3% | 2 | 12.5% |
| トラバサミ | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| 狩猟はしていない | 2 | 12.5% | 2 | 12.5% |

表5 未更新者の狩猟を続けてきた理由(N=13)(複数回答可)

| 理由 | n | (%) |
|----------------|---|-------|
| 鳥獣被害を減らすため | 7 | 53.8% |
| 趣味として面白いから | 4 | 30.8% |
| 自然との触れ合い | 2 | 15.4% |
| 獲った獲物を食べるため | 2 | 15.4% |
| 銃が好きだから | 2 | 15.4% |
| 仲間との交流 | 2 | 15.4% |
| 猟犬との一体感 | 1 | 7.7% |
| 健康のため | 1 | 7.7% |
| 獲物の大きさの記録更新のため | 0 | 0.0% |
| 現金収入を得るため | 0 | 0.0% |
| その他 | 1 | 7.7% |

※無回答は3名であった。

狩猟を続けてきた理由については、「鳥獣被害を減らすため」(53.8%)が最も多く、ついで「趣味として面白いから」(30.8%)、「自然との触れ合い」、「獲った獲物を食べるため」、「銃が好きだから」、「仲間との交流」(それぞれ15.4%)が多かった(表5)。

未更新者が狩猟を辞めるまでに育てた弟子の数については、回答者全てが「0人」であった。

狩猟を辞めた理由

狩猟を辞めた理由の平均スコアは、「狩猟にかかる経費が高い」(3.55)が最も高く、ついで「猟銃の規制」(2.70)、「高齢化や病気」(2.67)、「仕事が忙しくて出猟する時間がない」(2.64)、「獲物の数の減少」(2.22)であった(図2)。狩猟を辞めた理由として、「そうである」と回答した割合を選択肢ごとに算出したところ、「高齢化や病気」(41.7%)が最も高く、ついで「狩猟にかかる経費が高い」(36.4%)、「仕事が忙しくて出猟する時間がない」(35.7%)であった(表6)。

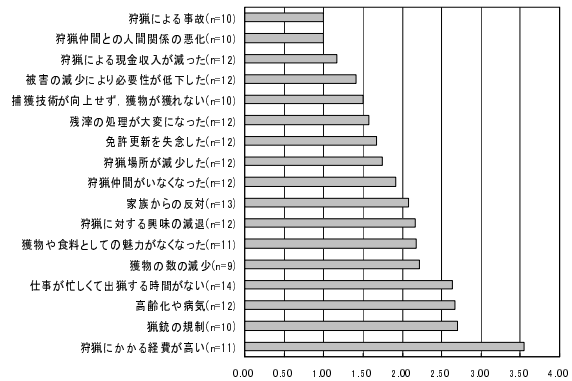


図2 未更新者の狩猟をやめた理由の平均スコア(最小値1.0, 最大値5.0で、ポイントが高いほど選択されている)

4. 考察

本県の未更新者の年齢を見ると、60代、70代で最も多く、狩猟を辞める決定的な要因として「高齢化や病気」が最も多く選ばれていたことから、狩猟者としての寿命を全うした上でリタイヤした人が多かったと考えられる。その一方で、狩猟経験年数が浅い人が多く、また本県の狩猟者全体の狩猟者登録状況から見ても、未更新者の中に網・罠免許所持者が多かったのは、近年の野生鳥獣害の深刻化に伴い、手軽に狩猟を始められる網・罠免許の取得者が増加したためではないかと推察される。狩猟を続けてきた理由として、獣害対策が最も多く選ばれていたのは、このことを示唆していると考えられる。同様の現象は、島根県(上田・神崎, 2006)や栃木県(丸山・神崎・上田, 2004)でも見られている。島根県の狩猟者の実態を多面的に評価した上田(2009)は、被害対策目的の新規狩猟者の増加政策が野生動物管理に与える影響を評価し、農家自身による捕獲体制が構築された反面、狩猟者の公益的機能の低下や狩猟技術や情報などの伝承が断絶するなど、政策に内在する問題を指摘している。本県においても、狩猟の実態や狩猟者の意識を調査し、狩猟政策の科学的な評価を行う必要があると考えられた。

狩猟を辞めた理由のうち平均スコアが最も高かったのは、「狩猟にかかる経費が高い」であった。サンプル数が少なく詳細な分析はできなかったが、これも獣害が影響していると考えられる。つまり、趣味ではなく農地を守るための獣害対策として始めた狩猟に、狩猟税だけでなく猟友会費などの諸経費がかかることに対する不満の表れであろう。平均スコアで見ると、「猟銃の規制」は2番目にスコアが高かったが、狩猟を辞める決定的な要因としては、順位が低かった。本調査では、猟銃の規制強化は狩猟を辞める直接的な要因になっているとは考えにくかったが、改正銃刀法が施行される2009年以降の調査を踏まえて判断する必要がある。

5. 謝辞

本調査にあたり、アンケートにご協力いただいた元狩猟者の皆様に心から感謝いたします。また、群馬県環境森林部自然環境課の坂庭氏には、本調査の実施にあたりご助力をいただきました。ありがとうございました。

6. 引用文献

環境省(1963-2005)鳥獣関係統計。

丸山哲也・神崎伸夫・上田剛平(2004)栃木県における新規狩猟者の意識調査。野生鳥獣研究紀要 30, pp84-92.

上田剛平(2009)島根県のイノシシ管理における狩猟の実態と狩猟者の意識に関する研究。平成20年度東京農工大学連合農学研究科 博士論文, 159p.

上田剛平・神崎伸夫(2006)島根県における新規狩猟者の実態とその意識。野生生物保護 10(1): pp9-19.

表6 狩猟を辞めた理由について、「そうである」を選択した回答者数とその割合

| 理由 | 有効回答数 | 回答数 (%) |
|-------------------|-------|---------|
| 高齢化や病気 | 12 | 5 41.7% |
| 狩猟にかかる経費が高い | 11 | 4 36.4% |
| 仕事が忙しくて出猟する時間がない | 14 | 5 35.7% |
| 猟銃の規制 | 10 | 2 20.0% |
| 免許更新を失念した | 12 | 2 16.7% |
| 家族からの反対 | 13 | 2 15.4% |
| 獲物の数の減少 | 9 | 1 11.1% |
| 捕獲技術が向上せず、獲物が獲れない | 10 | 1 10.0% |
| 狩猟仲間がいなくなった | 12 | 1 8.3% |
| 狩猟に対する興味の減退 | 12 | 1 8.3% |
| 被害の減少により必要性が低下した | 12 | 1 8.3% |
| 狩猟による事故 | 10 | 0 0.0% |
| 狩猟仲間との人間関係の悪化 | 10 | 0 0.0% |
| 狩猟による現金収入が減った | 12 | 0 0.0% |
| 狩猟場所が減少した | 12 | 0 0.0% |
| 残物の処理が大変になった | 12 | 0 0.0% |
| 獲物や食料としての魅力がなくなった | 11 | 0 0.0% |